

追悼

松井達夫先生 を悼む

東京大学名誉教授 井上 孝

松井達夫先生は、東京大学土木工学科を昭和3年3月に卒業せられ、主として都市計画行政に参加され、晩年は、早稲田大学において石川栄耀先生の開かれた都市計画の講座を継承され、多くのすぐれた人材を世に送り出され、本年1月、92才の天寿を全うされて鬼籍に入られた。謹しんで、その御功績を讃え、御逝去に哀悼の意を表する次第である。

先生の官庁や学会におけるご活躍については、多数の人々がよく知っておられることと思ひ、私は、先生の御仕事の一面であった海外の都市計画活動の一端に触れて先生を偲ぶよすがと致したい。

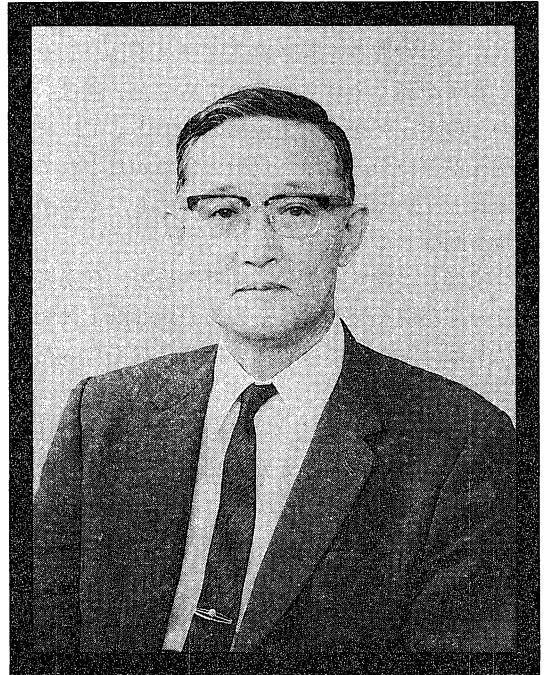
わが国の都市計画学界と海外の接触のはじめは、米国占領軍より贈られた当時の海外都市計画に關する参考書と、当時日比谷にあったアメリカ文化センターに毎月送られてくる参考書や雑誌のなかから、最新の情報を得ることであった。

先生も、これらの資料の存在をなおざりにされず、屢々その情報を引用されたことを記憶している。

しかし、日本の都市計画界が、はじめて海外の都市計画家と交流する機会を与えられたのは、昭和33年夏、大手町のサンケイホールにおいて開催されたエスカップの前身であるエカッフェによる地域計画のセミナーであったと思う。先生はこの議事の推進に協力され、しばしば、日本代表全体を主導されて、ユーゴスラビア出身で国連の地域開発部門を主宰されていたワイズマン氏との交流を深められたのである。

そして、このような日本の専門家の集団は、その後、日本生産性本部が主催した「米国の都市再開発の調査団」に結実し、先生はその団長として、今にして思えば、すぐれた団員の方々を統率されて得難い情報を持ち帰られた。

私は、先生とは、10年以上の年令差があり、囲碁のたしなみもないため、くつろいでお話をす



故 松井 達夫 氏

本会の元会長松井達夫氏には平成9年3月25日永眠されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

社団法人 日本都市計画学会

機会に乏しかったが、先生が必ずにこやかに対応される思い出を心得ていた。

それは、1976年夏、オランダのアムステルダムで国際住宅都市計画連合の国際会議が開催せられ、先生は、日本の代表団の団長として視察旅行をまとめられた。私は、その会議をもって2年間の会長の仕事をつぎのオランダ代表のケネー副会長にゆずることになっており、会議のすべてが終了した最後の夜のお別れパーティーを、主催者のオランダ市当局は、多分さまざまな経緯があったと思うが、オランダの誇る国立美術館を会場として、時刻を一般の入場者のはいらぬ夜に選び、多数の名画が壁面を飾る広間に、天下の銘酒をならべ、招待された各国の参加者は、その銘酒を楽しみながら、名画を見て回る機会を与えられた。名画のなかには、同館最大の所蔵物であるレンブラントの「夜警」も含まれていた。

この話題を持ち出すと、松井先生は、必ず手短かに、夜会の段取りを話され、グラスを持つしぐさで、右手を高く上げられるのであった。私は、先生のこのポーズを「人生至福の時」として、その当手を偲びつつ、いつも畏敬の念に満たされてかしまっている自分を解放して、私も、その至福の時を回顧するのであった。

「夜警」と題するこの名画は、後に、乱暴者により一部が切り裂かれ、その報を新聞紙上に知った私共は、もう、あの至福の機会はなくなったのだと納得した。

先生と海外の交流については読者各位に余り知られていないと考え、その一端を記して改めて先生の御冥福をお祈りする次第である。

松井達夫先生の業績

(社)日本都市計画学会会長

早稲田大学教授 戸沼幸市

松井達夫先生が3月25日、92才で逝去された。告別式が行われたご自宅近くの総持寺の庭には、桜が咲きほこっていた。今世紀を生き抜いた都市計画家が、桜の下、20世紀の柩に長身を横たえて、悠然として逝かれたというおもしろい話がある。

松井先生は昭和32年、官界から前任者の故石川栄耀先生の後を引く継ぐ形で早稲田大学に来られ、以来18年間、都市計画の教授として大勢の学生を指導された。私として、強く思い出に残っているのは早大「21世紀の日本」研究会の代表としての松井先生の御指導を得たことである。この研究会は昭和43年、内閣（当時佐藤栄作首相）が催したコンペティション—21世紀の日本の国家と国土の姿を求める—to応募するために故吉阪隆正先生等が幹事となり、文系、理系を含み大学を横断する形で作られた研究会であったが、教員と院生合わせて100人を越す学際的大人数によるものであった。当時は安保問題を巡って早稲田に限らず、大学は学園紛争の最中であり、「21世紀の研究会」でも議論百出、案を集約するのが難しかった。そんな時、「総合大学とは種々な考えがあるのは当然で一つの題目を囲んで討議できることが面白い

とあって、少しも慌てずに若手の乱暴な意見にも、にこにこしておられた。これは昭和45年、内閣審議室に「アニマルから人間へ」「ピラミッドから網の目へ」として報告し、政府総合賞を得た。この報告書には東北遷都や分権型国家論などが含まれていた。

松井達夫先生は日本の戦前・戦後の都市計画の発展の中心点におられたと言っても過言ではない。

昭和3年東京帝国大学土木工学科を卒業後、東京市技手（昭3）、都市計画東京地方委員会技師（昭10）、内務省大臣官房都市計画課技師（昭12）、建設院都市局土木課長（昭23）、建設省都市局都市建設課長（昭25）、同復興課長（昭26）、首都建設委員会事務局長（昭29）、科学技術庁科学審議官（昭31）、と日本の都市計画行政の推進者として戦災復興など数々の業績を残された。昭和32年早稲田大学に来られたが極めて謹厳にして清廉な雰囲気を持ち、いかなる時でも崩れることなく、これが日本の官吏というものかとの強い印象を与えた。それでいてこよなく酒を愛し、興がのれば唄や落語が飛び出すなど洒落なお人柄でもあった。囲碁がまためっぽう強かった。

松井先生は広く社会活動もなされた。日本都市計画学会会長（昭44～45）、都市計画協会副会長、首都整備委員会委員、都市計画中央審議会委員などを歴任されたが、かたわら、地方自治体の都市計画の指導、助言や、台湾、韓国など近隣諸国の都市づくりについても熱心に指導された。

松井先生は数十篇の論文や都市についてのエッセイを残されているが、いづれも実務家、実践者としてのその時々を生々しい発言であり、空論はない。空論はないが、座談の名手としてのユーモアがあり、人を魅惑する文章である。高齢になられても、実にしっかりと記憶力をもっておられ、よく、問題点を見定めて、論じておられた。

松井先生のお宅と私の家は近所でもあり、時々おたずねして、お話をうかがったり、碁を打っていただいた。「愛想が悪くて（負かして）すまんね」とにこにこしておられた。碁はまるで敵わなかったけれども、後進の一人として、都市計画に限りない愛情を注がれた松井先生に少しでも近づきたいものである。先生のご冥福をお祈りする次第である。